

大阪大谷大学

平成三十一年度 入学試験問題（公募制推薦 後期）

国 語

注意事項

- 一 問題用紙は全部で十二ページです。解答用紙は一枚です。
- 二 解答用紙の所定欄に受験番号と氏名を記入してください。
- 三 解答はすべて解答用紙の所定欄に記入してください。
- 四 問題用紙は持ち帰ってください。

□ 小説の主人公「私」は、夫、夫の両親、夫が飼っていた猫と死別し、一人で暮らしている。次の文章を読んで、後の問に答えよ。(設問に字数制限がある場合、すべて句読点等は字数に含む)

青年は幾度も槍を投擲した。構える、助走をする、投げる、槍を取りに行く、それを抜いて助走の印まで戻る。これを淡々と繰り返した。こんなにも見事な肉体が躍動しているというのに、競技場を包む静けさはどこまでも変わりがなかった。私の耳に届いてくるのは、スパイクのピンの音、槍が手を離れ飛び出す瞬間の空気を切る音、そして青年が芝生を踏みしめる音、それだけだった。投擲が生み出すそれらの音たちは、静けさの底へと慎ましく吸い込まれていった。青年のジャマにならないよう、私は咳払い一つせずに息を殺していた。

最初のうち一連の動きを目で追うだけで精一杯だったのが、しばらくすると各動作の形や、つながり方や、それらの意味や、投擲についてのいろいろなことを感じ取れるようになってきた。まず驚かされるのは、何度投げても青年の助走に狂いがないことだった。スタートが四歩、中間が八歩、槍を引いてからフィニッシュまでが七歩。青年の両足はその歩数を正確に刻み続ける。日差しが強くなろうと、風の向きが変わろうと関係ない。4、8、7。4、8、7。4、8、7。その繰り返しが大地でメロデーをカナでる。

助走の間、槍はユウゼンとして青年に身を任せている。無闇に気負ってもいなければ、怯えてもいない。青年の命じるとおりに従えば、それがつまりは善きことなのだ、と信じるかのように心を落ち着けている。

助走のスタートに立った青年が、右肘を折り、肩の上に槍を構える瞬間が私は好きだった。それはいかにも大事なものを身に引き寄せ、一体になろうとしている姿だ。青年と槍、彼らだけに通じる合図が交わされている。十九歩先ではたちまち離れ離れになると決まっているからこそ、いつそう彼らは親密につながり合おうとする。青年は耳たぶと頬に槍のしなやかさを感じ、槍は彼の掌の中で、揺るぎのない安定を感じている。

もちろん宙を飛んでゆく槍も好きだ。案外それは低い角度で飛び出し、青年の手を離れた途端、様子を一变させる。放物線を描くなどという生易しいものではなく、まるで新たな生命を得たかのように全身を震わせながら激しく空気を切り裂いてゆく。その震えを目で追いかけるだけで私は胸がどきどきし、このまま槍が滅茶苦茶な方向へ飛んでいってしまったらどうなるのだろうと思ったりするが、心配はいらない。そこには見事な抑制が利いている。槍は青年が見定めた一点を忠実に捕らえ、最も洗練された軌跡を選んで落下する。いや、落下という言葉は適切ではないかもしれない。槍はただ静かに着地するのだ。

いつの間にか太陽は高くのぼり、朝の気配はすっかり消え去っていた。木のベンチはしっとりと温かく、丁度いい具合に窪んでいて座り心地がよかった。観客席の脇で枝を広げるクスギのおかげで、気持ちのいい影が差し、足元で木漏れ日が揺らめいていた。相変わらず、別の誰かがここへやって来る気配はどこにもなかった。

もう十分槍は遠くまで飛んでいるように見えるのに青年は満足せず、練習はいつまでも続いた。槍を投擲する、ただそれだけの練習だった。槍投げの選手が槍を投げる練習をする、この当たり前の風景がなぜか特別なものに感じられた。私の眼前で繰り広げられているのは、肉体を使う運動であると同時に、孤独な思索でもあった。

青年にとっては、槍を投じている時間より、歩いている時間の方がずっと長い。一投ごとに、五十メートル以上先の槍を取りに行き、また助走のスタート位置まで戻ってくる。青年はうつむき加減にゆっくりと歩く。スパイクに踏みしめられる芝生の気配が、私の耳元にも届く。⑤ いっしかフィールドに一筋、彼の通り道ができています。

歩きながら青年は考えている。さっきの投擲を頭の中で再現し、修正をホドコしているのだろうか。次の投擲で試みるべきポイントを、整理し直しているのだろうか。あるいはもつと別の何か、例えば死んだ人のことを、考えているようにも見える。

青年の背中では死者を悼む姿に似ている。死者が倒れ伏した場所まで、一歩ずつ歩み寄ってゆき、抜け殻となった魂を地面から引き抜く。ついさっきまでの躍動の記憶が残るそれを握り締め、自らに引き寄せ、遠い宙の果てに去ってしまった彼らの声を聞きながら、再びこちら側へと戻って来る。槍を投げることで、青年は黙々と⑥ 自分の使命を果たしている。

スパイクの爪先つまさきで二、三回軽く地面の印を蹴けったあと、青年は何度目かの投擲準備に入る。髪の毛先から汗がこぼれ落ちている。足元には彼が脱いだ洋服と靴とリュックサックが、一塊になって置かれている。逆光の中浮かび上がる肩の筋肉を、私が目でなぞっている間に青年は槍を握る。すぐさまそれは地面と平行になり、肩の上の定位置に納まる。彼らが I となる、私の最も愛する姿だ。誰が合図を送るわけでも、どこかでピストルが鳴るわけでもなく、彼一人が決心した最良の一瞬でスタートが切られる。

最初の四歩はあくまでも軽い。体中ほとんどどこにも、槍を握る指にさえ、力が入っていないかのようなのだ。これから訪れる爆発の予感よかんは筋肉の奥深くにヒソひそんだままで、まだ目には見えない。しかし既に準備は整っている。

五歩めからは明らかに、スパイクの音も髪の毛の乱れ方も息遣いも、すべてが違ってくる。みるみるスピードが上がり、その勢いが両足から上半身へと蓄えられてゆく。ああ、このまま彼はどこまで行ってしまふのだろう、と私は胸が詰まる思いにとらわれるが、青年と槍の一体感はいささかも失われてはいない。それどころか今や槍は青年の筋肉の一部となり、腱けんの一筋となり、精神の支柱にさえなっている。

やがて十三歩めを迎えると、槍は後方へ引かれ、上体がねじれ、足が交差し、体の部位は次なる次元へと移行をはじめ。いよいよなのだという予感が抑えきれなくなり、私は両手を胸の前できつく合わせる。青年の視線ははるかな一点に定まり、それはもう決して揺るがない。

胸が開き、右手は一杯に引き伸ばされ、両足によって大地からくみ上げられた力が青年を満たす。全身の筋肉は、ただ宙の一点に飛んでゆく槍のためだけにすべてを捧たかげている。その時、筋肉たちは最も美しいラインを描き出す。上体が沈むとともに左足に体重が乗り、肩を支点にして斜めに向いた槍の先端と、青年の視線が重なり合う。極限まで引き絞られた肘と肩が、次の瞬間、槍を解き放つ。右足の甲が地面を削る。

まるで青年の一部分が、天に差し出されたかのようなのだ。青年から託されたものを身にまとい、その重さに畏怖おそそを抱きつつ槍は

震えている。青い空で銀色の直線がきらめいている。もはや青年は何もできず、無言でそのきらめきを見送る。槍は神の描いたラインをなぞってゆく。

(小川洋子『人質の朗読会』より)

問一 二重傍線部 a く e のカタカナを漢字に直せ。

問二 傍線部①「スタートが四歩、中間が八歩、槍を引いてからフィニッシュまでが七歩」とあるが、槍を投げる直前までの「四歩」「八歩」「七歩」において力の込められ方がどのように変化していくか。本文中の言葉、及び、「四歩」「八歩」「七歩」を用い、七十字以内で説明せよ。

問三 傍線部②「十九歩先ではたちまち離れ離れになる」とあるように、槍は「青年」の意志と肉体を離れて飛んでゆく。その槍の軌道を決定する超越的な存在を「私」は感じ取っている。それは何か。本文中から漢字一字で抜き出せ。

問四 傍線部③「特別なもの」とあるが、その説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア コーチや仲間のない競技場で、こつこつと自分の技を磨いている青年の向上心に、「私」は特別なものを感じている。  
イ 槍投げの練習としてはごくありふれた内容ながら、青年がそれを繰り返す情熱に、「私」は特別なものを感じている。  
ウ 槍投げの練習でありながら、一投一投に深く考える青年の姿に、「私」は強い共感を抱いて特別なものを感じている。  
エ 槍投げの同じ動作を繰り返す青年の姿をただの練習とは思えず、「私」は宗教儀式にも近い特別なものを感じている。

問五 傍線部④「孤独な思索」を「私」はどのように想像しているか。それが最もよくわかる段落の最初の五字を抜き出せ。

問六 傍線部⑤「いつしかフィールドに一筋、彼の通り道ができてい」とあるが、なぜそうなったのか。それが最もよくわかる箇所を、傍線部⑤のある段落以外から五十字以内で抜き出し、その最初と最後の五字をそれぞれ答えよ。

問七 傍線部⑥「自分の使命」とは何か。「くこと」につながるように、本文中から五字で抜き出せ。

問八 空欄 

|   |
|---|
| I |
|---|

 に入る語を、本文中から漢字二字で抜き出せ。

問九 作者は何度か隠喩で槍を表現している。その一番最後の例を、本文中から五字で抜き出せ。

問十 作者小川洋子は一九九一年に芥川賞を受賞している。芥川賞は芥川龍之介にちなむものだが、芥川龍之介の作品でないものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 地獄変
- イ 河童
- ウ 夜明け前
- エ 歯車

㊦ 次の文章を読んで、後の問に答えよ。(設問の都合上、省略している箇所がある。なお、設問に字数制限がある場合、すべて句読点等は字数に含む)

『坊っちゃん』は何度読んでもおもしろい。そのつど新しい発見がある。読み終わると、きつと幸せな気分につつまれている。はじめはストーリーの展開が楽しかった。若い教師が旧制中学の教師として四国の城下町へ赴任してくる。出くわしたドウリョウに、さつそくあだ名をつけた。赤シャツ、のだいこ、うらなり、山嵐……。

② 腹に一物ある赤シャツはイヤなやつだし、ゴマすり男ののだいこは、もつとイヤなやつだ。とどのつまり坊っちゃんは正義漢の山嵐と二人して、陰謀組に天誅を加える。のだいこの顔が卵の黄身で黄色くなったのは、いいキミだ。胸がスカツとした。なんとも歯ぎれのいい物語で、これが百年ちかくも前に書かれたなんて信じられない。同じころに無数の小説が発表されたはずだが、あとかたなく消え失せている。たとえ探し出して開いたとしても、おそろしく古ぼけ、カビくさくて、とても読めたものではない。どうしてひとり『坊っちゃん』だけが、いつまでも新しく、若々しいのだろう。

そんなことが気になって読み返すと、なるほど、小説そのものは百年ちかく前の産物だが、書かれていることは現代とちつとも変わらないことに気がつく。小説のブライは四国の城下町で、出てくる人物はおおかた中学教師や生徒たちだが、どの町であつてもいいし、どんな職場でもかまわない。

どこであれ、またいつであれ、「タヌキ」などと **I** をたたかれる人物がいるものだ。『坊っちゃん』の場合と同じように、このタイプはなぜかたいてい、校長、社長、会長、委員長など「長」のつく地位をシめている。「古ダヌキ」などと、一字加わることもある。

赤シャツもきつといる。表では人をおだてて裏であれこれと画策している。「長」のつく人間にピタリと寄りそい、じつと後釜を狙っている。この手のボスにはまた必ずゴマすり型がついていて、調子のいいことを言いながら、すり寄っていく。



「足元を見ると、畳付きの薄っぺらな、のめりの駒下駄がある」

赤シャツ宅の玄関で見かけたのだいこの下駄のこと。履き物一つにも人間の II ところが出ている。現代だと、品のない細身のエナメル靴といったところか。

小説では「うらなり」と名づけられた英語の教師。生まれがよくて、お人好しで、気が弱い。赤シャツにコンヤクシヤをさらわれたあげくに、したくもない転勤のうき目をみた。小説だけの事柄ではないだろう。いまもどこかで、さぞかし似たようなことが起きているのではなからうか。

そんなことに思いがいくと、『坊っちゃん』がガラリとちがつて見えてくる。ニガ味が入り、社会批判がまじってくる。料理でもそうだが、甘いだけでは、おいしい食べ物にならない。塩が振りこまれて、味が深まる。名作『坊っちゃん』は決してお子様ランチではないのである。

主人公は「坊っちゃん」とあるだけで、姓も名もわからない。しかし、年齢はこまかく書いてある。まだ経験に乏しいと赤シャツにいわれ、坊っちゃんは答えた。

「どうせ経験には乏しいはずです。履歴書にもかいときましたでしたが二十三年四カ月ですから」  
性格はどうか。当人の口から、出だしの一行に述べてある。

「親譲りの無鉄砲で子供の時から損ばかりしている」

一本気で、竹を割ったような性格。「親譲り」が何度か出てくるから、父親も似たような人だったのだろう。「チャキチャキの江戸っ子」などとよばれるタイプで、何かあるとベランメエ調でまくしたてるが、そのくせ会議や何かのときは、「咽喉がふさがって」しゃべれない。おおよそ人となりがわかるのではあるまいか。

年齢、性格、生い立ちから、赴任先の月給、「一週二十一時間の授業」のことまできちんと書いてあるのに、名前ばかりはシユウシワからない。タイトルの「坊っちゃん」で押し通してある。こんな小説も珍しいのだ。

ほかにも気がつくことがないだろうか。

たとえば親指の甲をはすに切り込んだくんだり。幸いにも指の骨は硬いので「親指は手についている。しかし創痕は死ぬまで消えぬ」

家族のことでは、兄がおとなしい勉強家だったが、自分は手のつけられぬ乱暴者、母が将来を案じていた。

「行く先が案じられたのも無理はない。ただ懲役に行かないで生きているばかりである」

巧みに時間の経過がつけ加えてある。四国の城下町に赴任したのは、あきらかにずっと以前のことなのだ。何年前かはわからない。かなり前であつて、相当むかしのことなのだ。

東京から四国が遠かつたように、語られている経過と語っている現在とは、あきらかに時間的にへだたっている。語られているのは二十三歳四カ月の「坊っちゃん」だが、語っているのは、もはや坊っちゃんではないだろう。赤シャツにいわれたような未経験の青年ではなく、ことによると、すでに頭に少し白いものがまじりだした齢かもしれない。

だからこそ冒頭の「親譲りの無鉄砲」が深い意味をおびてくる。当人は「無鉄砲」と称しているが、不正や謀りごと、たくらみが大嫌い、ウラ表のある人間に我慢がならない。世の中、人の動きに同調できない。そんな自分を「親譲りの無鉄砲」といつたまでである。鉄砲ダマのように、まっすぐにしか生きられない。

小説のおしまいに、「ある人の周旋」で新しい職場へ技手として入つたとあるが、きっと技手のまま定年を迎えそうな人なのではあるまいか。

そして清は、ただの年とつた下女ではないだろう。意味がしだいに変わっていく。ひそかな恋人、ただこちらのマドンナは、うらなり先生のそれとはちがいが、心変わりなどしない。世の中に合わせられない「坊っちゃん」を、じつと見守っている。

⑦ 「だから清の墓は小日向の養源寺にある」

影をおびた人が、何かを思い出すように墓前にいる。読後のしみじみとした幸せは、「坊っちゃん」のもつ、ひそかな影のせ

いだ。

(池内紀『池内式文学館』より)

(注) 天誅：天罰。

のめりの駒下駄：裏面の前部を斜めに切り、前傾姿勢になるように作ってある男子用の駒下駄。

技手：鉄道会社の技術関係の仕事をする者。

清：小説の冒頭と結末に登場する「坊っちゃん」の家に奉公する下女。「坊っちゃん」にとって、「あなたは真っ直ぐでよい御気性だ」とほめてくれる唯一の存在。

問一 二重傍線部 a く e のカタカナを漢字に直せ。

問二 傍線部①「読み終わると、きっと幸せな気分につつまれている」とあるが、筆者はその理由をどう考えているか。それが最もよくわかる一文の最初の五字を、本文中から抜き出せ。

問三 傍線部②「腹に一物ある」とあるが、それを最もわかりやすく言い換えている一文の最初の五字を、本文中から抜き出せ。

問四 傍線部③「いいキミだ」の「キミ」がカタカナで書かれている理由を、二十字以内で説明せよ。

問五 空欄 **I** に入る語として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 中傷    イ 悪口    ウ 悪態    エ 暴言    オ 陰口

問六 空欄 **II** に入る語を、本文中から抜き出せ。

問七 傍線部④「名作『坊っちゃん』は決してお子様ランチではないのである」と断定する理由に当たる一文の最初の五字を、本文中から抜き出せ。

問八 傍線部⑤「竹を割ったような」の意味に最も近いものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア きっぱりした    イ さっぱりした    ウ しっかりした    エ のんびりした

問九 傍線部⑥「語られているのは二十三歳四カ月の「坊っちゃん」だが、語っているのは、もはや坊っちゃんではないだろう」とあるが、「」の付いた坊っちゃんと、「」の付かない坊っちゃんの相違は何か、四十字以内で説明せよ。

問十 傍線部⑦「影をおびた人」について、

(1) この「人」は誰か。本文中から抜き出せ。

(2) 筆者が「影をおびた人」と表現したのは、この「人」に対する筆者の認識に基づくが、「影をおびた」という表現と最も関係が薄い本文の記述を、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 主人公は「坊っちゃん」とあるだけで、姓も名もわからない。

イ すでに頭に少し白いものがまじりだした齢かもしれない。

ウ 鉄砲ダマのように、まっすぐにしか生きられない。

エ ひそかな恋人、ただこちらのマドンナは、心変わりなどしない。